

Since 1976

横浜市立元石川小学校

令和3年10月29日



学校だより

11月号

HP <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/motoishikawa/>

横浜市青葉区美しが丘4-31-1

TEL 045(902)1821

間違いを直せるようになるまで

副校長 藤本 光子

気温がぐっと下がり、朝夕は冷え込む季節となりました。その一方で、元石川小学校では様々なイベントを前に、子どもたちの熱気が増してきています。6年生から5年生へ受け継がれる元小ソーランの発表、4年生・5年生の西湖宿泊体験学習など、高学年は忙しくも充実した日々を送っています。一度しかないこのときを大切に、全力でかけぬけてほしいです。

さて、先日1年生の国語の授業に少し関わる機会がありました。「まちがいをなおそう」という学習で、自分の書いた文章を読み直し、間違いに気づき、正しく直す、つまり1年生なりに推敲する力を付けることを目標にしています。

最初に、タヌキのさんちゃんの日記を読みました。さんちゃんが書いた文章の間違いを見つけて教えてあげるとい活動です。そのクラスの子はきらきらした瞳で文章を見つめ、ゲーム感覚で間違いを探します。「分かった！ぼくは、が ぼくわ になっている！」「ここに マル〇（句点）がないよ！」次々と間違いを見つけては、嬉々として間違い箇所を発表していききました。それから、文の間違いを見つける〈コツ〉を考え、さんちゃんに教えてあげました。得意気な顔をして、さんちゃん（のイラスト）に向かって教える姿はとてもかわいらしいです。



タヌキのさんちゃん

ところが、さんちゃんの間違ひは見つけられるのですが、いざ自分の文章になると、うまくいかないのがこの学習の難しさです。「自分が書いたものを読み返す」という活動が、子どもにとってどれほどハードルが高いものなのか、よく分かります。また、自分の間違いを指摘されたり、間違えていること自体を認めたりすることにも抵抗があるのでしょう。それは子どもに限ってのことではないかもしれません。私も文書を作成していて、自分の間違いをなかなか見つけられないときがあります。他者に間違いを指摘されると「恥ずかしい」「申し訳ない」という気持ちになります。そういう気持ちは子どもも大人も似ているのだと、改めて感じました。

「這えば立て 立てば歩めの親心」

字が書けるようになったら文を書きましょう。文が書けるようになったら間違いを正しましょう。これは大人側から見た期待のこもった言葉です。ですが、この言葉を子ども側から見るとどうでしょう。

「立てるようになるから見ていてね、歩けるようになるから応援してね」

こんな思いではないでしょうか。ついこの前入学したばかりの子どもたちが、文が書けるようになっただけでもすごい成長です。たくさんほめ、一緒に喜び、「もっとできるようになりたい」という気持ちを育てていくことが、私たちが一番大切にしなければいけないことだと思います。「すぐにできなくても大丈夫、いつかできるようになるよ」と子どもの気持ちに寄り添って声をかけるとともに、できるようになるまで繰り返し指導していきたいです。そして、小さな成長を大きくほめることで、子どもが自信をもって成長できるようにしていきたいです。